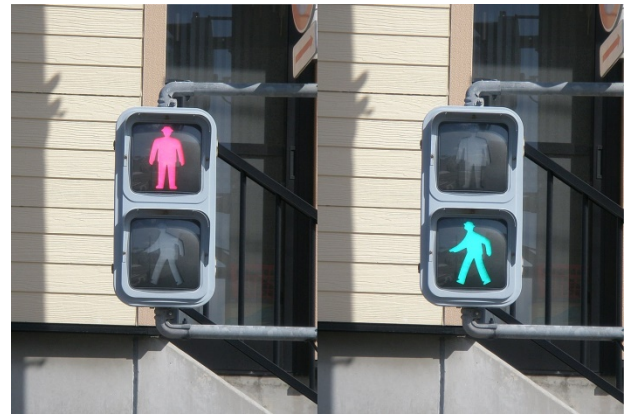


新CL寓話—V

David K. Reynolds, Ph.D.
2019

第1部

5. 止まっている時間



愛くるしいスージーは幼稚園に通っています。ある日、スージーは幼稚園からカボチャの種を家に持って帰りました。種を植えて、水やりを続ける、ハロウィーンまでにかぼちゃを育てる宿題です。

スージーはガラス瓶の中に肥沃な黒い土をいっぱい詰めて、その中に種を植えて、気をつけて水をやり、瓶を台所の窓辺に置きました。そして、瓶の前に座り込み、種が育つのを見つめました。

「スージー、何をしているの？」とティーンエイジャーの姉、ルーシーが尋ねました。

「かぼちゃが育って、もっと大きい瓶に入れ換えるのを待ってるの」とスージーが答えました。

「ばかじゃない、カボチャになるまでまだまだずっと先よ」とルーシーは笑いながら言いました。

「いいのよ、ずっと待つんだから。お姉ちゃんは電話のそばに座って何をしているの？」

「ビルから電話があるかなと思って待ってるの。ビルは転校生ですてきな。彼は私が好きなんじゃないかなと思うの」。

「うちの電話番号を知ってるの？」スージーは賢い質問をしました。

「うーん、たぶん。ビルはボブを知っていて、ボブはうちの番号を知っているから」。

「おお」、ちょうどその時父親がキッチンに入ってきました。

「私に電話はなかったかい、ルーシー？」と尋ねました。

「ううん、今朝はなかったわ。特に何か？」

「うん、先週出版社に原稿を送ったんだよ。出版社が私の原稿をとりあげるかどうか知らせてくるはずなんだがな…」。

「まあ、今までは何もかかってきてないわ」とルーシーが言いました。

「ありがとう。じゃ芝刈りの仕事に戻るかな」と冷蔵庫から缶ビールを一本つかんで、スクリーンドアから庭に戻って行きました。

隣の部屋から母親の声がかろうじて聞こえます。ミシンの音にかき消され、声はほとんど聞きとれません。母親は自分に向かってつぶやいていました。

「あの人は書き物からいつまでも戻るのかしら？エンジニアとして、しっかり生計をうまく立てられるのに。執筆家には絶対なれないといつかは悟るにちがいないと16年も待ったわ。ミシン掛けの内職と舅姑の援助がなかったら…」。

外から戻った猫がスクリーンドアを爪で開けろとかいています。スージーはすぐにドアを開けて中に入れました。跡をつけると、丸ぼちゃの猫はキャットフードが閉まってある食器棚にまっしぐらに向かいます。猫はお座りをして床をかき、餌を催促して、ミャーミャー泣き声を立てます。

この物語はどれもとらえどころがないように思われます。たぶん著者である私は明日には面白い結末を考
えるでしょう。読者のみなさん少々お待ちください。


この物語ではだれもが何かを待っています。スージーはカボチャの種が育つのを待ち、ルーシーと父親は電
話がかかってくるのを待っています。母親は当てのない変化を待ち、猫は餌を待っています。著者も読者も
物語の終わりを待っています。

.....

何かを待っているとき、人生が一時中断したように思う人がいます。いいかえれば、ただ待つだけで、待ち
時間を賢く使っていません。電車を待つ間、コンピュータが立ち上がるまで、面接試験の結果を知るまでの
待ち時間をどうしますか。若者には人生はとて長く思われるでしょうが、1分を無駄にできるほど長くはあり
ません。

待ち時間を面白く、勉強や他の活動でいっぱいにしてください。

(アメリカ・オレゴン州CLセンター所長)

 [目次へ戻る](#)